



# 日本宗教史 1 日本宗教史を問い直す

吉田一彦・上島 享 編  
吉川弘文館

名古屋市立大学大学院人間文化研究科 博士後期課程 修了生 市岡 聡

『日本宗教史1 日本宗教史を問い直す』（以下「本書」）は、吉川弘文館から刊行されたシリーズ「日本宗教史」全6巻の巻頭を飾る、「シリーズ全体の総説にあたる巻」（吉田「総論」）という位置づけのものであり、本学の吉田一彦氏が長年にわたり準備をしてきた珠玉の一冊である。

## 1. 本シリーズの目的

宗教史の理解は、各時代の社会や文化的確な把握に繋がり、日本宗教史の具体像とその特質を解明することで、日本の歴史と文化の全体像を展望するという本シリーズの刊行目的が本書冒頭の「刊行のことば」に記されている。この目的を達成するために、本シリーズでは四つの観点から日本宗教史を描き出していくとする。一つ目は、各時代の特質や時期的な変遷あるいは継続の様相を明らかにすることで、宗教を基軸にした日本の歴史と文化の姿を考究すること、二つ目は、世界の文化と歴史の中で考える、とりわけ文化交流史の視座から日本宗教史を叙述すること、三つ目は、人々の信仰の実態に着目して宗教史を考究すること、四つ目は分野横断的に日本宗教史を捉え、再構築することである。この観点は本書においても見ることができる。

## 2. 本書の概要

本書は、はじめに吉田一彦氏による総論「日本宗教史を問い直す」を置き、その後、第一部「日本宗教史像の再構築」と第二部「人文諸学からの視座」の二部で構成されている。第一部は、日本における仏教や神祇祭祀に関する宗教史を、古代（吉田一彦「日本古代の宗教史」）、中世（上島享「日本中世の宗教史」）、近世・近代（林淳「日本近世・近代の宗教史」）に分けて論じている。吉田氏は、「総論」において「日本宗教史の全体像について短時間でそのエッセンスを知りたいという読者には、ここからお読みいただければ幸いである」と記しているが、第一部では各時代の宗教史がコンパクトに、そして、読みやすくまとめられている。

第二部では、文化交流史（橋本雄「文化交流史から問い直す—〈和漢梵〉の構図論に向けて—」）、彫刻史（肥田路美「彫刻史から問い直す」）、建築物（山岸常人「建築物から読み解く日本の宗教—建築から問い直す—」）、宗教テキスト（阿部泰郎「宗教テキストが繋ぐ文学と宗教史—源信伝と仮託聖教『真如観』の地平—」）、民俗学（松尾恒一「民俗から問い直す日本の宗教・信仰—世界のなかの日本、日本のなかの世界—」）という異なる分野から日本宗教史を論じている。第二部の諸氏のタイトルを見ると、多くに「問い直す」という語が入っている。これは、日本宗教史を様々な分野から見直すということを意味しており、「総論」にある「人文諸学の視座から新たな日本宗教史を提示」していることを示す。

## 3. 本書の特徴

日本の歴史教育は、政治経済に関するものが主であり、仏教（仏法）や神祇祭祀という宗教に関するものは二次のようなイメージがあるが、古代以来、日本の政治経済と宗教とは密接不可分の関係にあり、さらに宗教は、芸能などへも影響を与えている。本書を読むと、このことが自然に理解できる。

本書第一部では、時間軸に沿って通史的に日本宗教史を論じ、第二部では、分野横断的に日本宗教史を論じている。いずれの章においても最新の研究成果を取り入れながらも、わかりやすく読みやすい文章でつづられており、日本宗教史に関する知識がない人でも、容易に読み進められるだろう。他方、日本宗教史を学んでいる者にとっては、自らが研究する分野に関する知識のブラッシュアップに活用でき、それ以外の分野については、自らの研究の通史的な位置づけや、異分野からの視点という発想を与えてくれるだろう。

本書の編者である吉田一彦氏は、総論において、本書を近年における日本宗教史の豊かな進展をふまえ、本書を新しい概説とすることを旨としてしているが、本書を通読すると、吉田氏のこの目論見は、見事に成功していることを実感できる。

本シリーズは本書のほかに、第二巻『世界のなかの日本宗教』（上島享・吉田一彦編）、第三巻『宗教の融合と分離・衝突』（伊藤聡・吉田一彦編）、第四巻『宗教の受容と交流』（佐藤文子・上島享編）、第五巻『日本宗教の信仰世界』（伊藤聡・佐藤文子編）、第六巻『日本宗教史研究の軌跡』（佐藤文子・吉田一彦編）が刊行されており、いずれの巻も宗教史を語る上で見逃すことのできない良書である。